魏晋南北朝時期の長安

窪添慶文

一

長安について書かれた論文や著書は数多い。しかし、それらは魏晋南北朝期の長安については触れないことが多く、触れたとしてもごく僅かである。たとえば、佐藤武敏氏の『長安』（近藤出版社、一九七一）は、漢以前、漢、唐の長安の三章構成になっていて、魏晋南北朝期についての記述はない。武伯綸氏の『西安歴史述略』（陝西人民出版社、一九七九）は、自然環境、石器時代、周、秦、漢、唐、唐以後と七章に分けて論じているが、魏晋南北朝については漢の章に付して、漢の長安の衰えを述べる一節が割り振られているのみである。朱士光氏主編の『古都西安』（西安出版社、二〇〇三）は六五八ページの大冊であるが、十六国北朝時期の漢の長安城という項目で実質二頁が費やされるのみである。武氏の場合のような、漢の長安城の衰微という観点からだけでは、魏晋南北朝時代の長安がもっている意義を十分に捉えられるとは思えない。史料的には零細である故、十分な検討はできないが、以下、魏晋南北朝時代の長安について、概要

を記すこととしたい。

二

一九〇年、董卓は献帝に強要して洛陽から長安に移った。長安は前漢末の赤眉の乱で廃墟となっていて、『後漢書』によれば、高祖劉邦の廟と京兆府の建物だけが残っているだけで、献帝はそこに仮の住居を定め、のち修築された未央宮に移ったという。それでも洛陽から、これも強制されて多数の吏民が移住したから、長安の人口は一時的に増加する。董卓は長安城の東に塁壁を築いてそこに居り、西の郿県に巨大な万歳塢を築いて大量の食糧備蓄を行ったが、部下の呂布に殺される。董卓死後の長安は大混乱に陥り、董卓配下の李傕・郭汜らが呂布を駆逐したあと、彼らが長安城を舞台に激しく戦いを繰り返す。献帝は一九六年に長安を脱出し、洛陽に戻って曹操の庇護を受けることになるが、『後漢書』董卓伝は、この間の争いで宮殿や官府は焼かれ、献帝が長安に入った時は三輔の戸口は数十万あったが、この段階では「長安城空なること四十余日、強き者は四散し、羸き者は相い食み、二、三年の間、関中復た人跡無し」と、長安及びその周辺の惨状を伝える。なお、郭汜は部下に殺され、李傕は一九八年に討滅された。

ほぼ百年後の二九二年、潘岳が晋の長安県の県令となって赴任し、職務の暇に巡察した時の状況を「西征賦」（『文選』巻一〇）に、「街里蕭条として邑居は散逸。営宇寺署、肆廛管庫、城隅に蕞芮（小さくまとまる）たる者、百に一も処らず」と描写し、尚冠・脩成（修城）・黄棘・宣明・建陽・昌陰・北煥・南平という漢の長安城中の里は「皆な夷漫

滌蕩（何もなくなってしまう）し、其の処亡くして其の名のみ有り」としている。後漢末の破壊から長安がなお回復していないことが述べられているわけである。数字を含めて文学的修辞の可能性はあるが、人口が激減し、官庁街や商店街が縮小し、消滅した街区があることは事実である。ではあるが、魏の時代、そして西晋の時代、長安には雍州の治所が置かれており、かつ都督が府を開く場所でもあった。政治的、軍事的に重要な位置を占めていたのである。特に、蜀すなわち四川地方との関係においては、長安が重要な拠点であった。曹操は二一五年に長安から漢中に入って張魯の五斗米道王国を滅ぼし、二一九年には長安の西の斜谷道を通って再度漢中に入り、劉備軍と戦っている。蜀の諸葛亮（孔明）の五次にわたる北伐に対処したのは曹真、ついで司馬懿（仲達）であったが、その根拠地は長安であった。二二八年の孔明の第一次北伐に際しては明帝自ら長安に赴き、魏軍の背後を固めたし、二三四年の第五次北伐でも群臣は明帝の長安行幸を提案している。この時の明帝は、司馬懿に対処を委ねて自らは呉軍に向かうという政治的選択を行ったが、群臣は長安の重要性をよく認識していた。魏から漢中、蜀を攻める場合（蜀から魏を攻める場合も同様）、ルートはほとんど秦嶺越えに限られたから、長安は要の位置にあったのである。二三〇年の曹真、二四四年の曹爽の漢中進攻は、中途で取りやめられたものの、長安が起点であったし、二六三年に蜀を滅ぼした鍾会と鄧艾の場合も関中から出撃している。

三

三国時代から西晋にかけてまがりなりにも安定していた長安であるが、四世紀に入ると間もなく大きな変乱を経験する。軍事力を握る晋の宗室諸王による内乱（八王の乱）の一方の雄、河間王顒が長安に拠っていたからである。河間王の配下で洛陽に駐屯していた張方が、恵帝に強制して洛陽から長安へ行幸させ、長安に入った恵帝は征西将軍府を行宮に定める。三〇四年のことである。河間王顒に対抗して挙兵した東海王越は三〇六年に長安を陥し、恵帝を洛陽に連れ戻す。この時には大規模な掠奪があり、二万人が殺されたと伝えられる。長安をめぐる争いはその後も継続したが、その年の末に河間王顒が殺され、これでもって八王の乱は終結する。

長安にはさらに大きな事件がふりかかる。三〇四年に漢王と称して五胡十六国時代の幕を開いた匈奴族の劉淵は、三一〇年に死去するが、一代おいて後を嗣いだ劉聡が派遣した劉曜らが三一一年に西晋の都洛陽を陥し、懐帝を捕らえて平陽に移し、二年後に殺害する。晋の人々は愍帝を推戴して長安に拠るが、四年間持ちこたえたものの、三一六年に長安は陥落し、愍帝は捕らえられて平陽に送られ、翌年殺され、西晋はここに滅亡する。『晋書』愍帝紀によると、「帝の皇統を継ぐや、永嘉の乱に属し、天下崩離し、長安城中の戸は百に盈たず、牆宇頽毀し、蒿棘林を成す。朝廷に車馬章服無く、唯だ桑版にて署号するのみ。衆は唯だ一旅、公私に車四乗あり。器械多く闕け、運饋継がず」と、長安の甚だしい寂れようを記す。洛陽陥落という非常事態により、人々が避難した結果であり、それ以前の長安がこれほどの

寂れようではなかったことは、前述の「西征賦」に明らかである。河間王顒の敗北で、大きな打撃を受けたことは間違いないにせよ。このままその状態が続けば四年間はもたなかったであろう。愍帝紀の記事は一時の状態を誇大に表現したものと考えられる。

三一八年に即位した劉曜は、都を平陽から長安に移し、国号を漢から趙に改める（前趙）。この段階では東方に石勒の勢力が大きくなっていて、石勒は翌三一九年に襄国（じょうこく）を都に趙を建国し（後趙、都はのちに鄴に移る）、東西に五胡の二国が対立する状況が初めて誕生した。東西に強大な二国が対立する状況は、五胡十六国時代にはこの後も二度出現する。前燕と前秦、後燕と後秦である。これら六国のうち、西に位置した三国、前趙（三〇四～三一九）、前秦（三五一～三九四）、後秦（三八四～四一七）はいずれも長安に都を定めた（もっとも前趙の事例にみられるように、国の存在していたすべての期間に長安が都であったわけではない）。長安が中国の西方の中心としての位置を占めていることは、このことによっても示される。

同様の現象は、北朝後期にも現れる。北魏が分裂した結果、東西に並立した東魏と西魏、その後継である北斉と北周のうち、西にあった西魏（五三五～五五六）と北周（五五七～五八一）は長安を都とした。

一時的なものを含め、東方に根拠を置いて華北を統一した王朝の場合、長安を都と定めることはない。後趙や北魏がそうである。他方、長安に都を置いた王朝は統一後もその状況を変えることはない。前秦がそうであったし、北周は北斉を滅ぼして華北を統一しても首都を長安から移さず、北周の継承王朝である隋も漢以来の長安城に代わり新たに大

興城を築いたが、同じ長安の地である。

長安を都としなかった国でも、長安を西方の統治の重要拠点とする姿勢をとる。後趙は第三代皇帝石虎の時、子の石鑒（かん）が長安に鎮し、鑒の後任となった石苞（ほう）は、一六万人を徴発して未央宮の城壁を修築している（1）。なお、石鑒は第六代の君主となる。前秦が三八三年に淝（ひ）水の戦いで敗北して以前に増した諸勢力分立の状態を招くと、西燕が三八五年に長安を攻略する。君主の慕容沖は長安に拠って政権を維持しようとしたが、鮮卑族は東に戻ることを求めて沖を殺し、慕容永ら四〇余万と称せられる鮮卑族は長安を離れる。この結果、長安は空虚となったと伝えられる（『資治通鑑』巻一〇六）。五胡時代の末期に陝西省北部の統万城に拠って天王と号した夏国の場合、四一八年に長安を占領した段階で皇帝号を称し、群臣は長安への遷都を勧める。北魏との対峙を重視した君主赫連（かくれん）勃勃は遷都を許さなかったが、長安に南台を置き、大将軍・雍州牧・録南台尚書事の官職を設けている。

夏が長安を奪取した相手は、後秦ではなく、東晋である。東晋の部将劉裕は四一六年から翌年にかけて北進し、まず洛陽を陥し、次いで長安を占領して後秦を滅ぼした。但し、劉裕はこの功績をもって東晋から帝位を奪うことを主目的とし、長安には息子の劉義真をとどめて建康に戻る。長安は結局赫連勃勃の攻撃に屈するのであるが、洛陽、長安奪回が劉裕の宋建国に大きく貢献したのであって、東晋・南朝においても長安のもつ政治的な意味は大きかったことが理解できよう。なお、劉義真は劉裕の指示で長安を離れる際に大規模な掠奪を行い、宝貨や士女を車に乗せて進むところを夏軍に襲撃されて大敗、義真に替わり長安を守った朱齢石は、長安の宮殿を焼き、撤退しようとして潼関で捕虜となっ

た。

夏から四二六年に長安を奪い、四三九年には甘粛西部の北涼を滅ぼして華北を統一した北魏の場合は、平城、のちには洛陽に都を置き、長安にのみ特別の扱いをすることはなかった。しかし、長安が西方の核として考えられていたことに間違いはない。北魏の初期には新たな獲得地に鎮を設置し、支配が安定すると州に切り替えたが、州になっても軍事的に重要な地には鎮が併設された。長安には長安鎮が置かれ、多くの場合、鎮のトップ鎮都大将が雍州刺史を兼任する。鎮将に就任した人物は皇子や胡族の名族出身者が多く、その帯びた将軍号も高い。鎮将や刺史は都督諸軍事として軍事的指揮権を持つが、その都督する範囲は雍州のほか、これも重要州である秦州など数州を含むことが多く、都督陝西諸軍事という事例もある（任城王拓跋雲）。洛陽に遷都して以後は、辺境を除いて鎮は見られなくなり、州には上中下の区分があったが、上州の中でも、長安のある雍州は、東方の冀・定州、南朝に対する最前線に位置する揚州とならび、就任する刺史の格が最も高かった。

北魏末、北辺の六鎮から始まった反乱は、領内各地に波及する。陝西地方の討伐に向かった蕭宝夤（しょうほういん）が本拠を置いたのは長安であった。彼はやがて自ら反旗を翻すが、敗北する。六鎮の乱は五三〇年に爾朱（じしゅ）氏によってひとまず終結したが、爾朱氏の政権も永続しなかった。この一連の過程から、六鎮のひとつ懐朔鎮出身の高歓が東方で台頭し、武川鎮出身の賀拔岳が大行台・大都督・雍州刺史として関中に拠って対抗する図式ができあがる。賀拔岳が高歓の策謀によって死去したあと、武川鎮出身者で固められた将領たちに推されて宇文泰が後継者となる。その宇文泰のもとに、高歓に

掣肘されるのを嫌った孝武帝が逃げ込み、東西に北魏が分裂するのであるが、孝武帝その人は宇文泰によって殺され、西魏の初代は文帝ということになる。宇文泰とその後継者は西魏の実権を握ったが、やがて西魏に代わり、北周を建国する。北周に代わった隋の楊氏、隋に代わった唐の李氏は、いずれも武川鎮出身であり、西魏・北周を支えた陝西・甘粛東部・河南西部の漢族を含めて、関隴集団と称せられる。

四

『漢書』地理志は漢の極盛期の戸数を一二三万余戸、人口を五九五九万余人としていて、そのうち一二県を領する京兆尹の戸口数は約一九万六千戸、六八万二千余人。他方、『晋書』地理志は呉を滅ぼして中国を統一した段階での数字を約二四六万戸、一六一六万余人と記し、長安など九県を領する京兆郡は戸数四万。晋代の全戸数が漢代の約二〇％であるのに対して、晋代の京兆郡の戸数も漢の京兆尹の約二〇％となる。長安近辺の戸数の減り方は全国平均とほぼ同じである。漢と晋では県数が異なることが示すように領域そのものの変化があるし、晋の時期の統計数が実際の数字をどの程度反映しているか、問題が残るが、潘岳の「西征賦」が示した長安の人口減は、中国全体の人口減と較べてみると、特筆すべきものではなかったであろう。ただし、漢の巨大な都城の跡に立ってみた場合の凋落の思いは拭いがたいのは当然であり、文学的表現としては、なによりそれを強調することになろう。

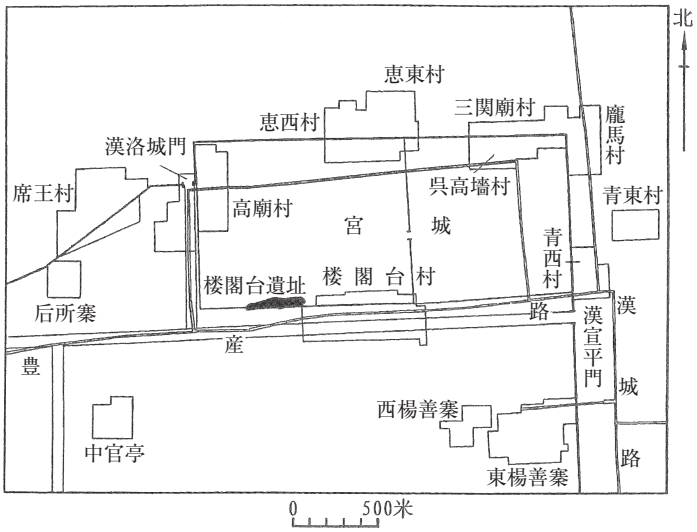
上述したところで分かるように、長安は何度も戦乱に巻き込まれた。宮殿の破壊、炎上、激しい掠奪、虐殺、居民の

離散が記録されている。これに対して、長安に都を置いた国は様々な対策を講じる。

五胡の君主は自らの族を首都に集めるのは当然として、屡々他種族の人々を長安へ移住させている。例えば、前秦の苻堅は後燕を滅ぼした時、皇帝であった慕容暐や王公以下の鮮卑四万戸を長安に徙した（『晋書』慕容暐載記）し、規模の大きいところでは、前趙の劉曜が氐・羌の部落二〇余万口を長安に徙している（『資治通鑑』巻九一）。一般に徙民は敵対する勢力の破砕と自己の経済基盤の確保のために行われるが、長安は何度も人口激減という状況を経験しており、徙民には人口増加策という側面もあったであろうと考えられる。

「西征賦」には、潘岳が長楽、未央、桂、建章の諸宮、承光などの殿、太液池などをめぐったとあり、漢代の宮や殿の名称を挙げるが、それに続けて「狐兎殿傍に窟」し、「禁省鞠まりて茂草と為る」と、それらが放置され、荒れ果てている様が描写される。これに対して後趙が未央宮の修繕を行ったことは前述したが、前趙や西魏も修理を行ったとされる（『読史方輿紀要』巻五三）。また諸政権は新しい建築をも行っている。前趙は光世殿、紫光殿を建築し、さらに長楽宮の東に太学、西に小学を建て、前秦は未央宮の南に聴訟観を作ったという類いである。

ところで二〇〇三年に西安市の楼閣台村の建築遺跡の調査が行われ、『考古』二〇〇八年第九期にその報告が載せられている(2)。この遺跡は東西に接続する二つの小城に分かれ、西城の城壁は東西南北がそれぞれ九七二、九七四、一二三六、一二一四メートル。東城の城壁は東が九九〇、南が九四四、北が九八八メートルで、西は西小城の東の城壁と重なる。東西を合わせると、南北がほぼ一キロメートル、東西が二・二キロメートルほどになる。位置は漢の長安城



『考古』二〇〇八年第九期によるが、字体を改めた。

（上掲の図参照）の東北部にあたり、その東城壁に開いた三つの門の最北にある宣平門から西に延ばした線と、漢の長安城の北に開いた門の中で最も東にある洛城門から南に延ばした線と、漢の北と東の城壁に囲まれた範囲にあたる。北と東、そして西の北端部分は漢の城壁と重なり、それを利用している。西小城の西よりの南端部には、二つの盛り上がり部をもった台地があり、東西の閣と主殿（基壇は一二八×四一メートル）とされ、それぞれの閣の南には闕（けつ）と目される土堆がある（3）。遺物などを含めた判断により、この遺跡は五胡十六国から北朝期のものであるとされる。

漢の未央宮と長楽宮の位置からは十六国時代の建築遺跡はあまりみられず、長楽宮跡からは北朝期の窯跡が大量に発見されていて、十六国・北朝期には漢代の旧宮は利用しなかったと考えられることもあり、楼閣台村の遺跡は、前趙以来隋初に至るまでの東西二宮の遺跡、つまり西小城が皇宮、東小城は東

宮、西宮内の楼閣台の遺跡は五胡十六国・北朝期の太極殿・路寝であったと想定されている。前述の石勒の未央宮城壁修築の事例にも矛盾しない。『晋書』苻健載記によれば、苻健は太極前殿で皇帝位に即いており、北周においては路寝が朝会の行われる最重要の宮殿であった(4)。

なお、五胡・北朝期の長安城に関しては、小城、子城、皇城などという語が頻見する。これについて史念海氏は実際上は未央宮を指すと考えておられる(5)。しかし楼閣台遺跡が上記のように考えられる以上、その説は再考の余地があろう。もっとも晋の愍帝の時の小城は未央宮としても問題はないと思われる。なお、対比して用いられる大城は漢長安城外郭であろう。

五

魏晋南北朝時期の長安は多難であった。しかし、都である以上、それにふさわしい施設は整えられる。宮殿群のほか、前趙は長安に遷都すると宗廟・社稷・南北郊を設け、太学を建てたし、五胡時代における霊台や辟雍の存在も確認できる。劉裕が長安を陥した時、「長安は豊全、帑蔵盈積す。公は先に其の彝器・渾儀・土圭の属を収め、京師に献」じており(『宋書』武帝紀)、皇帝権に必要な装置は備えられていた。前秦の苻堅は明堂を建て(『類編長安志』)、太学に臨んで学生に試験を行い、長安と諸州を結ぶ道路には柳などの樹木を植え、駅や亭を設けて旅行者は必要な物を補給でき、民は「長安の大街、楊槐を夾み樹え、下には朱輪を走らせ、上には鸞の栖む有り。英彦雲集し、我が萌黎に誨う」

と歌ったという（『晋書』苻堅載記）。いささか過剰な褒詞とも思えるが、安定した時期であったことは否定できない。クマラジーヴァが長安に迎えられてから死去するまでの八年間に精力的な訳教活動を行い得たのは、後秦政権が国家的事業として推進したことによるところが大きいが、それも、時期は長くはなかったにせよ、安定した時期であったからこそなしえたものであろう。

注

（1）漢の長安城の宣平門の調査の際、石勒が設置した石安県と思われる「石安」の字が刻された磚が出土している。王仲殊氏は、五胡十六国・北朝時期には、宣平門は青門と改称されていたとする（「漢長安城考古工作収獲続記――宣平城門的発掘」（『考古通訊』一九五八年第四期）。

（2）中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市十六国至北朝時期長安城宮城遺址的鉆探与試掘」。

（3）二〇〇九年一二月に東洋文庫中国古代史研究班はこの台地部分を中心に東西両城の境界部分までの視察を行った。台地部分では版築の様子を目視したが、漢代の瓦など夾雑物が含まれていることを確認できた。

（4）隋唐の長安城の太極宮の空間構造が基づくのはいつの時代であるかについて、様々な議論があり、有力な見解として、北周の宮の構造が隋唐に継承されたという考え方がある。ここではそれについては触れないが、近年の議論として内田昌功「北周長安宮の空間構成」（『秋大史学』五五、二〇〇九）を挙げておく。

（5）「論十六国和南北朝時期長安城中的小城・子城和皇城」（『中国歴史地理論叢』一九九七年第一期）。